

第17号

漱石山房記念館
道り

- 特集 一枚の写真から——千駄木町時代の漱石の書齋 2
二松学舎大学教授 山口直孝
- 展示報告・活動報告 4・5
- 漱石山房記念館所蔵資料の紹介 No.17 6
夏目金之助 橋口清(五葉)宛書簡 明治39(1906)年11月11日付
- ミュージアムショップ 7
- リレーエッセイ 第14回 漱石作品朗読への道り 8
神楽坂朗読サロン 鈴木千秋
- ミュージアムめぐり第8回 鎌倉虚子立子記念館 8

CONTENTS





一枚の写真から―― 千駄木町時代の漱石の書齋

二松学舎大学教授 山口直孝



――二松学舎大学と漱石――

夏目漱石は14歳の時、二松学舎大学の前身である漢学塾二松学舎で約1年間学んだゆかりがあります。また、二松学舎大学は、教育目標に掲げる「国語力」の象徴である夏目漱石をモデルに2016年より「漱石アンドロイドプロジェクト」に取り組んでいます。今年10月に漱石アンドロイドが当館にやってきました。次号の活動報告でご案内します。



『ホノホ』という雑誌をご存じだろうか。今の表記に直せば「ホノオ」、すなわち「炎」になる。110年以上も昔、読売新聞日就社が発行していた、青年向けの雑誌である。月刊で、毎号80ページ、名家の談話や内外の動向についての論説を載せ、小品文や新体詩などの投稿欄も設けられている。文学にも誌面が割かれており、小説、批評、消息記事を読むことができる。

創刊時の誌名は『中学文芸』、『中学雑誌』を経て、1907(明治40)年1月から『ホノホ』と改称されるに至った。「燃ゆるが如き青年の活気を善導」する目的のため、「光焰」を意味する語を選んだという(改題の趣旨)。多くの読者は得られなかったようで、同年の秋には『ムラサキ』という婦人雑誌と統合された。

『ホノホ』第1号となった新年号の口絵に、「夏目漱石氏の書齋」が掲げられている。この写真は、あまり知られていないかもしれない。本郷区駒込千駄木町時代のもので、この書齋を撮ったものでは、もう一枚、1906年3月に撮影された周知のものがあり、こちらは『新潮日本文学アルバム 夏目漱石』(新潮社、1983年11月)などに収録されている。『ホノホ』掲載分の漱石は、左に視線を向け、右手を机につけて、

ややくつろいでいる様子である。引いた構図となっており、部屋の様子を知ることができるのがうれしい。

高校、大学の友人であった斎藤阿具の所有する千駄木の家を漱石が借りたのは1903年、英国留学を終えてのことだった。以後、06年の歳末まで自宅で暮らしが続く。この家に居着くようになった黒い猫に着想を得て、『吾輩は猫である』が執筆されたことは有名である。『ホノホ』の写真が撮られたのは、雑誌掲載より少し前のことだろうか。

夏目鏡子『漱石の思ひ出』(改造社、1928年11月)には、千駄木の家の見取り図が掲載されており、間取りの詳しい説明がある。鏡子夫人の記憶は鮮やかであり、書齋については、「玄関脇の六畳で、間は襖になってゐるのですけれども、そこへ大きな本棚をおいて、わざく／＼一たん廊下に出て、そこから三尺の戸を開いて入るやうになつて居ります。」と証言されている。「大きな本棚」は、写真では漱石の後ろになる。重厚な洋書類が並べられた立派な本棚が襖の前に置かれているとは、ちょっと意外である。写っていない面(東側)には押し入れと窓があった。通りに面しており、向かいの下宿屋の書生に、被追跡妄想がひどかった時分

の漱石が「オイ、探偵君」と呼びかけたのは、この窓からである。

石崎等、中山繁信『建築の絵本 夏目漱石博物館 その生涯と作品の舞台』(彰国社、1985年11月)は、題名通り、漱石ゆかりの地と作品の舞台とをイラストで紹介した楽しい本。千駄木の家の書齋は、吹き抜け屋台の手法でいねいに描き出されており、一目で様子がわかる。けれども、机の位置と大きさは、実際とは違うようだ。『ホノホ』の写真では、机は濡れ縁(南側)に接するように置かれている。イラストで部屋の中央に机が配されているのは、参考にしたもう一枚の写真では、見当が付けにくかったからであろう。

机の大きさについて、『ホノホ』の訪問記事、松原生「夏目漱石氏の書齋」は、「偉大の机」と形容する。「猫」の苦紗弥先生が或る日其上で昼寝をして転び落ちたものと極めてよく似て居る、其上で昼寝が出来る位だから、勿論面積も大分広い」と記者は言う。本当に昼寝をしたかどうかはわからないが、大きなものであることは間違いない。この机は、早稲田南町の「漱石山房」では使われることがなかった。

書齋は、襖の前に本棚が置かれたため、「わざく／＼

一たん廊下に出て、そこから三尺の戸を開いて入らなければならなかった。しかも、三尺の戸の一部は本棚の厚みで塞がれている。濡れ縁から入ろうとすると、大きな机が邪魔をする。どうやらこの部屋は、他人をあまり歓迎しないらしい。家族から遠ざかろうという意志も感じられる。

『ホノホ』の書齋訪問は連載企画であり、漱石の後に徳富蘆花、島村抱月、山路愛山が取り上げられている。いずれも口絵が付いており、座卓か椅子付きの机かなど、比較して違いを見つけることができる。面白いのは、抱月、愛山の二人が子どもを連れてくることである。二人の写真からは、書齋も家の一部という印象を受ける。一方漱石には、書齋で家族と一緒に撮った写真が見当たらない。本を読み、執筆をする空間は、孤独を必要とする意識されていたのであろう。

書齋の写真、本の背文字は読めないが、訪問記事にいくらか言及がある。「ワートンのヒストリー、オフ、イングリツシ、ポエムの第一版」は、トマス・ウォートン(Thomas Warton)の『イギリス詩の歴史』(The History of English Poetry)のこと。イギリス文芸の歴史の先駆けとなった本書は、留学中に購入されたもの。「此前買った「ウアートン」の英詩の歴史は製本が「カルトパー」で古色蒼然として居て実に安い掘出し物だ」「(倫敦消息)」と、漱石は入手した喜びを述べている。倫敦から東京に持ち帰られた洋書は、現在東北大学附属図書館の漱石文庫が所蔵する。

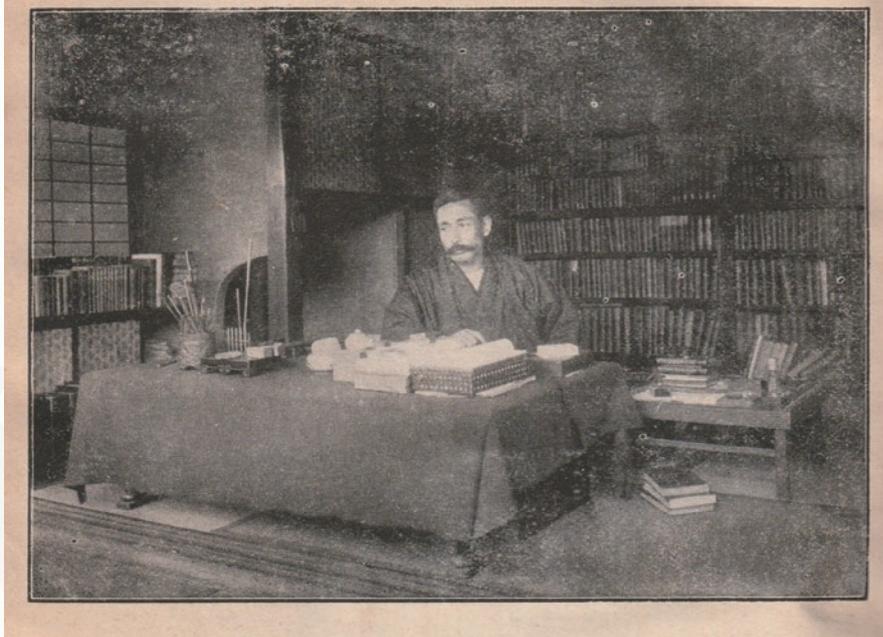
松原生の即物的な観察眼は、「之と云つて取立てる程の者はなく」というように部屋に裝飾品がないことを確認した後、机の上に向けられる。「本や硯や筆立の外に花瓶だの印形だの妙な箱だの訳の分らないもの

が沢山載せられて、硯の如きは三つも並べてある」となかなかぎやかである。横のちゃぶ台にも「硯が三つ」あったという。書画を好んで制作した漱石にとって、硯は一つで済ますわけにはいかなかったろうが、記者には奇異に感じられたらしい。膨大な原書と複数の硯との同居は、書齋の和洋折衷的性格をよく象徴している。

先に触れたように、漱石はここで『吾輩は猫である』を書いた。大学教員であった漱石が余技で記した散文は、『ホトトギス』に掲載されて評判となる。連載が長期となり、他の雑誌からの依頼も舞い込むようになって、執筆作業において創作の占める比重が増えていく。結果としてこの書齋は作家の仕事場になるが、元々はそうではなかった。

『ホノホ』同年6月号の鉄棒「仲間の噂」には、「漱石君が、「我輩は猫である」の上に、小説の二字を冠してから、今迄写生文と遠慮して居た、ツマラヌ文章にまで、小説の名を附けるやうになつた」という一節がある。飼い猫の視点で人間社会を戯画的に描いた作品は、発表当時、「写生文」とも「小説」ともつかない、異形の表現であった。新しいものが生まれるには、それにふさわしい場が必要ならぬ。家族と遠ざかるための部屋、西洋の文化と東洋の文化とが混じり合う空間は、創作の前提として欠かせなかった。小説家夏目漱石を誕生させた場所として写真を見直すと、千駄木町時代の書齋はさらに奥行きを増して迫ってくる。

(照参事記) 齋書の氏石漱目夏



「夏目漱石氏の書齋」(『ホノホ』3-1、1907年1月1日)



Profile

山口 直孝 (やまぐち・ただよし)
昭和37(1962)年、兵庫県神戸市生まれ。二松学舎大学文学部教授。
著書に、『大西巨人論——マルクス主義と芸術至上主義』(幻戯書房)、『私を語る小説の誕生——近松秋江・志賀直哉の出発期』(翰林書房)がある。漱石関連では、共編著『「坊っちゃん」事典』(勉誠出版)を手がけた。



展 示 報 告

《通常展》テーマ展示

漱石山房記念館 初版本コレクション

令和6年7月11日(木)～10月6日(日)

本展では、当館が所蔵する漱石の初版本を一挙に公開しました。これまで常設展や特別展で折にふれ紹介してきましたが、まとめて展示したのは初めてです。漱石の初版本は、橋口五葉や津田青楓、漱石自らも装丁を手がけ、出版された当初から本の傑作として知られています。その後の本の装丁に大きな影響を与えたといわれる、これらの美しい本を発行年順に展示しました。

「第1章 美しき初版本の世界」では、21冊の漱石の初版本を、書簡などに記された自著への思いと「吾輩は猫である」が掲載された雑誌『ホトトギス』や五葉に宛てた書簡、『四篇』に収録された「山鳥」の原稿など関連する資料とともに紹介しました。

「第2章 読者の広がり」では、松岡讓著『漱石の印税帖』より初版本や縮刷本の検印部数表を掲出し、版を重ね人々の手に渡っていく様子を紹介します。五葉の『吾輩は猫である』縮刷本装丁のデッサン画、検印部数表の基になった印税覚帳(松岡・半藤家資料)を展示しました。「第3章 門下生たちの初版本」では、森田草平、鈴木三重吉など門下生たちの初版本も紹介しました。夏休み期間中でもあったので、会場には初版本のシールを貼って作るワークシートを用意しました。就学前のお子さまから、大人の方まで楽しみながら活用してくださる姿を目にしました。最後に、好きな初版本に投票する「わたしの好きな初版本」コーナーを設置。結果は、青楓が装丁を行った『道草』が



第1位、第2位は『吾輩は猫である』下編、第3位は漱石が自ら装丁を手がけた、『ころ』でした。会期中少しずつ増えていくシールを見るのが、とても楽しみでした。投票にご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。



人物の関係について論じました。第2回は「明治の青春と挫折」として、「明治の精神」などをキーワードに、連載回ごとに場面を紹介しつつ、作品をさらに深く読んでいきました。

参加者からは「今回のような時代背景と共に知ることができるとより興味深く聞くことができました」などの感想をいただきました。

夏休み子ども講座 親子で楽しむ読書感想文

令和6年8月3日(土)

今年も、全国学校図書館協議会 学校図書館スーパーバイザーの藤田利江氏を講師にお招きして、小学校1～2年生の親子を対象に、読書感想文講座を開催しました。保護者が質問しながら子どもの気持ちを引き出し、一緒にワークシートに記入しながら感想文を作り上げていく方法を実践しながら学びました。講師が会場をまわり、一人一人にアドバイスをしたり、質問に答えたりしてくださいました。参加者からは「子どもへの質問の仕方がとても勉強になった。子どもの思ったこと、考えたことを聞くように心がけようと思いました」「娘がとても楽しそうに文章を書いてよかったです。やる気を出させる良いクラスでした」「優しい語り口で子どもも心を開きやすかったです」などの感想をいただきました。



夜間開館イベント 漱石山房講談会

令和6年8月17日(土)

漱石山房記念館の閉館後、夜間開館として講談会を開催しました。講談師の神田あおい氏に漱石の誕生から少年時代までを取り上げた創作講談「夏目漱石生い立ち」を軽快なリズムで語っていただきました。「この続きはまた別の機会に申し上げます」と締めくり、多くの参加者から「続きが聴きたい」との言葉をもらいました。最後は、背筋も凍る「四谷怪談」三本締めで幕を閉じました。



手紙講座 一心の医薬 夏目漱石の生活手紙文一

令和6年8月31日(土)

新聞やラジオ等でも活躍される手紙文化研究家、エッセイストの中川越氏による、漱石の手紙をテーマとした講演会です。お手製の漱石人形に見守られながら、お礼やお見舞いなど、テーマごとの手紙から漱石の人柄や手紙のテクニックなどをご紹介いただきました。和綴じの冊子や漱石と子規ゆかりの糸瓜の種などの資料も併せ、参加者の方からは「漱石の丁寧さ、優しさ、思慮深さが分りました。資料も大変素敵です」といったお声をいただきました。



開催中

特別展

『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆

令和6年10月12日(土)～12月15日(日)

※11月12日に展示替え

夏目漱石『三四郎』のモデルともされる小宮豊隆(1884～1966)は、福岡県仲津郡久富村(現京都府みやこ町)に生まれ、県立豊津中学校(現県立育徳館高等学校)を経て第一高等学校に進学しました。明治38(1905)年、東京帝国大学文学部独文科に入学し、夏目漱石に在学中の保証人になってもらい、以後門下生として木曜会の常連となりました。漱石のもと、朝日文芸欄の編集などに携わり、漱石の没後も夏目家を支え、『漱石全集』の編纂を担当し、今日の『漱石全集』の形を作り上げました。また、漱石山房に残されたままだった漱石書斎の蔵書を自らが館長を務めていた東北大学附属図書館に移管し、今日の東北大学コレクション「漱石文庫」の原型を作っています。

本年、小宮豊隆生誕140年を迎え、夏目漱石と小宮豊隆との交流の軌跡、小宮の生涯と業績を各種の資料から探っています。出身地のみやこ町歴史民俗博物館には1000点を越える「小宮豊隆資料」が所蔵されています。そのなかから選りすぐりの資料と、東北大学附属図書館「漱石文庫」からも珍しい資料をお借りし展示しています。是非お越し下さい。



活動報告 イベント報告

九日会 「夏目漱石の参禅について」

令和6年5月18日(土)

漱石山房記念館では、漱石の月命日の9日に漱石を偲び門下生らが集った「九日会」にちなんだ講演会を毎年開催しています。

今回は《通常展》テーマ展示『「門」—夏目漱石の参禅—』に合わせて、臨済宗円覚寺派管長の横田南嶺老師を招いて、禅の歴史と漱石作品、漱石自身の禅の捉え方についてお話いただきました。参加者からは「禅の世界から見える漱石の姿を感じました」「禅の話をもっと聞きたかったです」などの感想をいただきました。



文学さんぽ 「漱石の参禅」

令和6年5月29日(水)

「鎌倉漱石の會」の協力を得て、開催中の《通常展》テーマ展示『「門」—夏目漱石の参禅—』に合わせ、北鎌倉の東慶寺、円覚寺及び帰源院(通常非公開)を見学しました。「鎌倉漱石の會」代表の菅佐原智治氏と帰源院住職富澤宗實和尚の解説も加え、座禅体験及び国宝円覚寺舍利殿の見



学をするなど充実した内容でした。参加者からは「御住職の説明が良かった。思いがけず座禅を組んだり、国宝舍利殿まで拝見できて大満足です」との感想をいただきました。

第12回ふみのしおり朗読会「お話で日本旅行」

令和6年6月1日(土)

新宿歴史博物館ボランティアガイド朗読の会「ふみのしおり」によりこれまで3月に行ってきた「ひなまつり朗読会」から改めて開催されることとなった「ふみのしおり朗読会」。コロナ禍で思うように外出ができなかった日々がようやく明けつつある中、日本各地にまつわる作品の朗読を行いました。メンバーの皆さん自らが選んだ作品の舞台は、北海道から沖縄まで日本各地の10の場所。「とても良いツアーでした。素敵な企画ですね」などの感想をいただき、朗読で日本を巡るひとときとなりました。



文学連続講座 「こころ」を読む

令和6年7月20日、27日(土)

例年好評の、明治大学教授の松下浩幸氏による文学連続講座です。今回は、朝日新聞発表110年となる「こころ」を2回にわたって読み解きました。第1回「三人の〈父〉をめぐる」では、明治と大正それぞれの時代性を踏まえ、



No.17

夏目金之助

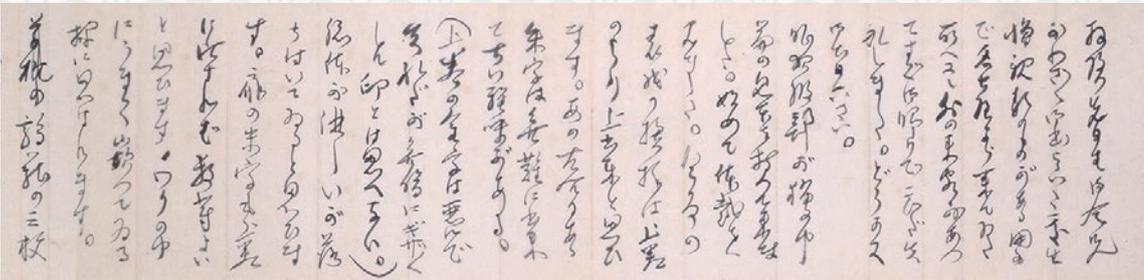
橋口清(五葉)宛書簡

明治39(1906)年11月11日付

この手紙は、『吾輩は猫である』中編の見本を手にした漱石が、その装丁を手がけた橋口五葉に宛てて書いたもので、五葉、浅井忠、中村不折と自著の装丁や挿絵に関わった人物に言及しています。五葉へは、中編の表紙や扉について上編より上出来と述べ、浅井忠の挿絵についての感想を尋ねています。上編で挿絵を担当した不折については、近頃は絵を頼みたくなくなつたという記述があります。この一通から漱石の自著への思いが読み取れる興味深い資料です。

五葉は『吾輩は猫である』上編で初めて本の装丁を行いました。以後、さまざまな趣向を凝らし『行人』まで多くの漱石作品の装丁を手がけます。不折は『吾輩は猫である』上編や『漾虚集』の挿絵を手がけ、『漾虚集』の挿絵について漱石は「類なき精巧のものにて出来の上は定めし人目を驚かすならんと嬉しく存候」(不折宛 明治39(1906)年3月2日付書簡)と喜びを伝えていきます。しかし、8カ月後に書かれた本資料にもあるように、『吾輩は猫である』中編の挿絵は不折には頼まずに浅井忠に依頼しています。漱石と浅井はロンドン留学中に親交を深めました。漱石は、浅井とともにロンドンの街を散策した際に感じた浅井の意識が常に色彩へと向かっている様子を、評論「創作家の態度」に記しています。

「うつくしい本を出すのはうれしい」と記していた漱石は、五葉や不折、浅井、『道草』『明暗』の装丁を手がけた津田青楓らの優れた装丁家、画家、書家とともに、美しい本の数々を送り出しました。漱石は上編よりも中編の表紙の方が良いと評してい



拝啓先日(御令兄がわざ／＼御出被下た処生憎親類のものがある用事て名古屋から来てゐた所へ又々外の来客があつてすぐ御帰りで甚だ失礼しました。どうか又御出下さい。

昨夜服部が猫の中篇の見本を持つて来ました。始めて体裁を見ました。今度の表紙の模様は上巻のより上出来と思ひます。あの左右にある朱字は無難に出来て古い雅味がある。

(上巻の金字は悪口で失礼だが無暗にギザ／＼して印とは思へない)総体が淋しいが落ち付いてゐると思ひます。扉の朱字も上巻に比すれば数等よいと思ひます。ワクの中にもうまく嵌つてゐる様に思はれます。

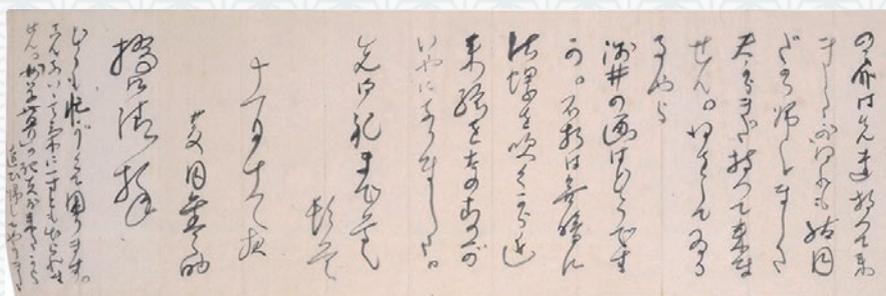
草枕の鶉籠の三枚

ますが、みなさんはいかががでしょうか。

(漱石山房記念館学芸員 向井優子)

【参考文献】

荒正人著、小田切秀雄監修『増補改訂 漱石研究年表』集英社、1984年
原武哲、石田忠彦、海老井英次編『夏目漱石周辺人物事典』笠間書院、2014年



の扉は先達持つて来ましたが何れも駄目だから帰りました夫からまだ持つて来ません。何をしてゐる事やら

浅井の画はどうですか。不折は無暗に法螺を吹くから近來絵をたのむのがいやになりました。

先御礼まで 草々

十一月十一日

頓首

橋口清様

夏目金之助

どうも忙がしくて困ります。こない、天氣に一寸とも出られせん。「文学世界」の記者が来たから追ひ帰してやりました



『吾輩は猫である』上編 表紙



『吾輩は猫である』中編 表紙

※翻刻中のルビは『定本漱石全集』

第二十二巻 書簡上(岩波書店、2019年)を参照して補いました。

漱石山房記念館オリジナルグッズ 新商品のご紹介！

今年のラインナップは、《特別展》『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆に合わせた『三四郎』初版本のデザインを使用したグッズ、発表から110年を迎えた『こころ』初版本のデザインを使用したブックカバー、好きなところに置ける漱石の亚克力スタンドです。ご来館の際にはぜひミュージアムショップにお立ち寄りください。



三四郎グッズ

夏目漱石『三四郎』初版本表紙 明治42(1909)年 装丁：橋口五葉

絵はがき



『三四郎』初版本の表紙をまるごと絵はがきにしました。
価格：100円

クリアファイル



初版本のデザインをそのままクリアファイルにしました。表紙の布生地の様子をみる事ができます。クリアファイルの裏面は、本を開いた時と同じ雰囲気を出すため、見返しのデザインを使用しました。
A4サイズ(縦31cm×横22cm)
価格：300円

三四郎セット



《特別展》『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆(会期～12月15日(日)まで)の期間に図録(価格1,000円)と当館三四郎グッズをまとめた「三四郎」セットを販売します。オリジナルエコバックも付いた大変お得なセットです。

価格：1,500円

メモ帳

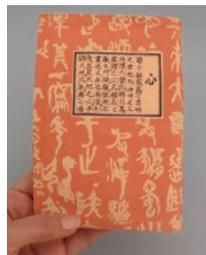
メモ部分は、初版本の見返しのタンポポの図柄と表紙のフクロウと函の植物を図柄に選び2種類のメモ紙を交互に綴りました。
(縦15cm×横10.5cm)
価格：350円



『こころ』ブックカバー

文庫本サイズ 価格：1,000円

夏目漱石『こころ』初版本表紙 大正3(1914)年 装丁：夏目漱石



表紙に使われている「心」の付箋部分は、清の康熙帝の勅撰により編纂された漢字辞典『康熙字典』の「心」の項です。ブックカバー作成では、この部分の文字を鮮明に印字することに苦労しました。ぜひ漱石自らがデザインした装丁の味わいをお楽しみください。

※価格はすべて税込です

〈問合せ〉新宿区立漱石山房記念館 ミュージアムショップ担当

電話：03-3205-0209 FAX：03-3205-0211
詳細はミュージアムショップのウェブページをご確認ください。
<https://soseki-museum.jp/user-guide/museum-shop/>



※当館オリジナルグッズは郵送でもご購入いただけます。



夏目漱石亚克力スタンド

価格：800円



『漱石写真帖』(松岡譲編 第一書房 昭和4(1929)年)から抜け出してきた漱石を亚克力スタンドにしました。漱石を自宅に置くことも、一緒に旅行に行くこともできます。

鎌倉駅東口で京急バス「鎌20」大塔宮行きに乗り終点大塔宮で下車後、徒歩10分ほど歩くと俳人高浜虚子、そして娘立子親子の記念館が小川沿いに見えてきます。虚子は夏目漱石に小説の執筆を勧めた文豪夏目漱石誕生の立役者です。



記念館では、虚子の自筆の俳句や家族で行った句会の成績表など貴重な資料が展示されています。そして、現在も多くの俳人・俳句愛好者に親しまれ、記念館の庭には句碑が建立されています。

記念館の館長であり、俳句結社「玉藻」の主宰、高浜虚子の曾孫の星野高士氏は虚子自筆「花鳥詠」額の前に展示した屏風について「句会で虚子が投句した短冊を集めて作られた屏風です。句会終了後に短冊は捨てるものですが、虚子の弟子が保管していました。貴重な短冊をぜひご覧ください」と話してくださいました。

近くには神社・仏閣もあり歴史と文学の地を巡ることができます。

鎌倉虚子立子記念館

住所 神奈川県鎌倉市二階堂 231-1
TEL 0467-61-2688 / 入館料 500 円
開館時間 水曜日と木曜日 事前予約制 ※電話予約
休館日 上記曜日以外・祝祭日・年末年始
https://tamamo.localinfo.jp/



お知らせ

現在開催中の展示

【特別展】『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆

会期 開催中～12月15日(日)

夏目漱石『三四郎』のモデルとされる小宮豊隆(1884～1966)と夏目漱石の交流の軌跡、小宮の生涯と業績を各種の資料から探ります。

観覧料 一般 500 円 小中学生 100 円



特集は二松学舎大学の山口直孝先生、リレーエッセイは、神楽坂朗読サロン鈴木千秋さんにご寄稿いただきました。ありがとうございます。

今年新たなミュージアムグッズを作成した『三四郎』初版本の表紙にいるフクロウは『吾輩は猫である』初版本の各背表紙にも登場します。

フクロウは、知恵・知識などの象徴とされ、現在でもフクロウが小さく描かれている本を目にします。装丁した橋口五葉も「知恵の象徴」としてデザインに取り入れたのではないのでしょうか。ミュージアムショップで可愛いフクロウをぜひご覧ください。

引き続き新宿区立漱石山房記念館をよろしくお願いたします。

表紙の
こぼれ話

「草枕」。漱石の中でいちばん好きです。詩的な自然描写が多い作品なので、漱石本の装丁を担当していた橋口五葉をリスペクトしつつアールヌーボー調の草花を描きました。(中川学)



Access

【電車】東京メトロ東西線「早稲田駅」1番出口より徒歩10分
都営地下鉄大江戸線「牛込柳町駅」東口より徒歩15分

【バス】都営バス(白61)「牛込保健センター前」より徒歩2分
※駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

- 所在地…東京都新宿区早稲田南町7番地
- 休館日…毎週月曜日(休日の場合は、直後の休日でない日)、年末年始(12/29～1/3)、展示替期間
- 開館時間…10:00～18:00(ただし入館は17:30まで)
- 観覧料…一般300円、小中学生100円、特別展開催時は別途定めます

新宿区立漱石山房記念館

TEL: 03-3205-0209 FAX: 03-3205-0211 <https://soseki-museum.jp/>

編集・発行 新宿区立漱石山房記念館(指定管理者:公益財団法人新宿未来創造財団)

表紙イラストレーション: 中川学



リレーエッセイ

第14回

漱石作品朗読への道のり

神楽坂朗読サロン 鈴木千秋

神楽坂朗読サロンの朗読会「『坊っちゃん』を読む」を、2018年に漱石山房記念館で開催したご縁で、翌年から始まった夏目漱石誕生記念「2月9日朗読会」へお声がけをいただき、以来毎年出演させていただいています。

20代の頃、幸田弘子先生の樋口一葉の朗読を初めて聴き、あまりの素晴らしさに私も朗読がしたいと思い、朗読と向き合い始めました。そして先生の朗読講座に通い始め、その後、弟子の会を立ち上げ、やがて早稲田大学エクステンションセンターやフェリス学院大学などで朗読講師を務めるようになり、11年前から神楽坂朗読サロンを主宰しています。18歳から80代後半という幅広い受講生のおかげで、指導しながらたくさんの刺激を受けています。

漱石没後100年の2016年、そろそろちゃんと漱石の作品を朗読したいと思ったのは人のご縁から。大切な友人に、黒岩比佐子さんという評伝作家がいました。残念ながら病気のため2010年に亡くなりましたが、漱石が大好きだった彼女とよく漱石談議もしました。彼女が著した評伝『食道楽』の人村井弦斎(第26回サントリー学芸賞受賞)は、明治期に一番売れた『食道楽』が、現代ではすっかり忘れ去られているのは何故だろうという動機から書かれたもの。彼女の没後、もしかしたら漱石も読んだのではといろいろと作品を探し読みして、とうとう『琴のそら音』の神楽坂の床屋のシーンで「何だい小説か、食道楽じゃねえか」というセリフを発見。それから漱石朗読に前のめりになりました。

漱石作品の魅力のひとつは、落語好きだった漱石らしく、文章がとてもテンポよく耳で聴いたときにとっても心地よいこと。『吾輩は猫である』の第1回が、正岡子規の旧居で行われた「山会」で高浜虚子が朗読してとても好評だったという逸話からも、漱石が耳で聴く文学を大切にしていたことが窺えます。これからも聴いて面白かったという作品を丁寧に紡いでいきたいと思います。

Profile

鈴木千秋(すずき・ちあき)



朗読家。幸田弘子氏に師事。神楽坂朗読サロン主宰。早稲田大学エクステンションセンター、フェリス学院大学などで朗読講師を務める。漱石、一葉などの朗読のほか「ピアノと朗読で奏でる源氏物語」の公演を重ねている。